

《回帰を巡る国際会議》報告 成田広樹（ハーバード大学）

二〇〇八年五月二六日から二八日にかけて、マサチューセツツ大学アマースト校において、回帰 (recursion) をテーマに一大会が開催された。(広義の) 言語機能 (FLB) のうち真にヒト言語に特有の構成素(狭義の言語機能、FLN)は音と意味への写像における回帰のみであるとするとするハウザー・チョムスキー・フィッチの仮説を巡って、言語学、生物学、哲学など様々な分野から百人以上の参加者が一同に集い議論を戦わせたが、しかし私見では学会を通して余り特筆すべき建設的な議論や意見の収束を見なかつたように思う。

回帰というテーマ設定が学会を通して曖昧なままにされていたことがこの結果を導く要因の一つであつたと思われる。ある演算Xについて、Xの出力それ自身が新たにXの次の適用の入力を成し得るとき、Xは回帰的であるという。回帰性は有限のアルゴリズムが離散無限の生成力を実現する上で欠かすことのできない形式特性であるが、しかし逆におよそ考えうる全ての離散無限のシステムには必ず何らかの形で回帰が潜んでいるとも言える訳で、そのような形式特性を満たすアルゴリズムは多数考えられる。従って、ただ回帰と言っただけでは議論の対象を建設的な議論に耐えうる形で限定することができないことは明らかである。実際講演者の多くは、①自身の過去の研究をただ回帰という語彙を使いながら練り直すだけに終わるか、或は②回帰の概念の恣意的な解釈に基づき先行研究に誤読による批判を加えることをするかに陥っていた。

ピラハ語には明らかな補文構造が見られないという観察からエベレットが「ピラハ語には回帰が欠如している」「従

ってハウザーらの仮説は誤りである」などと結論を導き出すのはまさに②のパターンである。補文構造は結局は併合 (Merge) の回帰的適用によつて得られる構文の一つに過ぎず、そのような構文が特定の個別言語において見られないということが仮にあつても、それは併合による最も原始的な回帰についてなんら反証を与えない、というのは藤田の指摘する通りである。

FLNの内実に併合による回帰を想定することに異議を唱える者はいない様であつた。併合の無限適用からくる回帰はしかしそのままではあらゆる文型を過剰生成してしまう恐れがあり、経験的な事実と符合しない。ホレブランゼやロパーらが指摘したように、言語獲得の各段階や個別言語の差異によつて実際には多くの回帰的生成力が未発現のままにされるのである。如何にそのような一見手に負えない回帰的併合を妥当な形で制限するかが言語学上の大きな課題であり、また今学会においてもそれが実質的なテーマとなつていくことが窺えた。語彙項目それぞれに特定の統辞操作を駆動する解釈不能素性(ウィルス)を割り振り、それらを照合する操作に様々なコストを仮定することで併合の適用に関する制限をコスト最小化の原理に帰する、というのが標準的なやり方であつたし、実際その趣旨の発表も多く見られたが、このようなアプローチでは記述に必要となる操作の数だけが極小主義の観点からみて好ましい方向であるかについては疑問の余地がある。チョムスキーは句構造ごとに主部(ラベル)を割り振る最小探查制約を、ブックスは相 (phase) ごとに適用される移送 (Transfer) の非対称性を併合による回帰の幅を大きく制限するものとして提案した。これらの提

案は併合を自然に制限する方向性としてウイルス理論とともに今後更なる検討の余地があるだろうが、そういった言語学内部の問題設定が関連分野の研究者を巻き込むような建設的な展望に発展することを願ってやまない。

ハウザーらの仮説が言語機能の出自を巡る諸問題に関して専門の垣根を越えた学際的交流を促したことは疑いない。言語機能の内実に関してFLNとFLBの別を設けることで、言語進化についての論説に散在する用語上の混乱を正すというのが彼らの本来の意図であつたし、それはある程度達成されたと言えようが、しかし彼らがFLNに関する具体的な提案として持ち込んだ回帰という概念が先に見たような新たな用語上の混乱の原因になっているとしたら実に皮肉なことである。有意義な学際的交流を目指す上では、他分野で蓄積された仮説やデータを慎重にしかし大胆につき合わせる寛容な態度を共有することが重要だと実感させられる学であった。

《回帰を巡る国際会議》

Recursion: Structural Complexity in Language and Cognition

<http://www.umass.edu/linguist/recursionconf/>